The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	時間の支配 ： 資本の有機的構成の呪縛 ： ポストン・ホロウェイ・ネグリ
Author(s)	野尻, 英一
Citation	変革のアソシエ. 2014, 15, p. 6-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【特集】資本の支配と限界 II——モイシェ・ポストンの批判理論

時間の支配：資本の有機的構成の呪縛

——ポストン・ホロウェイ・ネグリ

野尻英一（自治医科大学准教授）

このジレンマから逃れる唯一の道は、時間自体を攻撃することである。ジョン・ホロウェイ(1)

1. 文明論としてのマルクス

元来マルクスの思想は、資本主義的生産システムがグローバルな展開を遂げるにつれて、人類社会がどのような方向に向かい、人間存在がどのように変質していくのかを考究する文明論的な視角を持っていた。今日、マルクス『経済学批判要綱』より得られるビジョンからマルチチュードという新たな主体の誕生を論じるネグリ／ハート(2)や、資本による社会・地理的な再編制の効果をテーマとするデヴィット・ハーヴェイ(3)の仕事のように、欧米圏ではマルクスの文明論的な問題意識を現代に継承する仕事が続いている。

本論文で論じるモイシェ・ポストンの『時間・労働・支配』(4)も、価値法則による社会支配を論じることで資本主義社会の軌道を分析しており、時間論的な『資本論』読解である点で上記二者いずれとも内容は異なるものの、文明論的な視角を有する点は同じである。マルクス主義における価値論研究といえば日本にも蓄積はあるが(5)、価値の問題を解いたときに何がわかるのかという大きな問題意識の点でポストンの理論にはあらためて学ぶべきものがある。

ポストンの『時間・労働・支配』は、二一世紀におけるマルクス解釈の基本テキストとなりうる業績である。画期的であるとは、こ

れより後戻りすることはもはや不可能である、という意味においてである。どうしてそう言えるのかについてはこれから述べるが、ポストン理論が提供するマルクス解釈は、たとえばヘーゲル『精神現象学』に対するコジェーヴの解釈のように、ヘーゲルが書いていないけれどもそこに含有されていたはずの欲望論としての可能性をそのページの余白に読み込むというような意味での〈独創性〉に溢れたものなのではなく、むしろその特徴は、『資本論』におけるマルクスのロジックをそのままに読むという姿勢を貫徹した点にある。

この『資本論』のページ上の論理をそのままに捉えて再構成するという一見地味な仕事は、歴史的・政治的・心理的な障壁によって、多くのマルクス主義理論家たちが失敗し続けてきたタスクである。その結果、マルクスが晩年の全精力を注いだ『資本論』には資本主義を打ち破るプログラムが内蔵されているはずだ、という思い込みをもって『資本論』を読み始めてしまう悲劇は、今も後を絶たない。あるいは逆に『資本論』を、共産主義（社会主義）の主張を展開するための政治的なパンフレットであると誤解し、手に取らない者も多い。ポストン理論の最大の功績は、この思い込みを払拭して『資本論』をグローバル時代の文明論として読むための道しるべを示したことにある。

簡単に言って、『資本論』とは「資本」という特殊な対象の運動を叙述し、分析しようとした書物である。資本とは哲学的に言えば〈主―客統一体〉、あるいはより正確には〈差異性と同一性の同一性〉としか言いようのないものであり、ヘーゲル哲学の用語で言えば〈否定性〉と呼ばれる人間精神の特殊な性質が、ある特殊な社会的形式にトラップされた結果、社会的な自立性を得て人間精神の外部に（これも後に議論するが）自律的な軌道を描いて存在するようになったものであると言えよう。『資本論』の理論的試みにおいては、資本が同一性を保ちながらも動態性を有し「資本の有機的構成の高度化」（これについても後に詳述）と呼ばれる一つの軌道を辿るメカニズムが解明されている。この場合に、叙述の主役はおのずと資本となる。

したがって、要するに『資本論』とは、ヘーゲルが『精神現象学』において歴史の主体を〈精神〉としたこと、より正確には自らの運動性において歴史の運動そのものを生み出す主体を〈精神〉であるとした洞察を継承し、それを〈資本〉に置き換え、その運動を可能にしている歴史的・社会的形式の分析を行ったものであるということになる。『資本論』の空間はすでにあらゆる事物の商品化が達成された資本主義の空間、すなわち〈商品空間〉であることはマルクス自身の叙述を素直に捉えれば明らかである。

ところが、マルクスが商品空間の〈外部〉を描かなかったとすると、いったいそこからの脱出はいかにして可能となるのかが見えにくくなる。だから、マルクス主義の理論的な課題としてたとえば『資本論』の冒頭におかれる商品論の〈商品〉は単純商品なのかそれとも資本主義社会における商品なのか、あるいは、生産物や労働のもっている価値から交換価値が自立するのは価値形態のどの段階においてなのか、等々と『資本論』の叙述の内部に資本主義以前から資本主義以後への〈移行〉の機制を読み込もうとする仕事が多くなされてきたし、『資本論』の理論的解明と言えば、むしろそうした研究こそが主流であったとも言える。しかし実は、この〈移行〉の問題は、『資本論』の叙述の外部の問題である。

『資本論』そのものには〈革命〉のプログラムは内蔵されていない、という見解は、たとえばモイシェ・ポストン、ジョン・ホロウェイ、アントニオ・ネグリ(6)といった現代のマルクス解釈者に共通しているものである。後に詳しく見るように、この三者の立場はそれぞれ異なるけれども(7)、いわゆる伝統的なマルクス主義において唱えられるところの〈共産主義革命〉によって資本主義を克服することはできないし、マルクス自身も克服できるとは考えてはいなかった、という『資本論』の読みの水準において一致している。〈共産主義革命〉をここでは簡単に私有財産と自由市場の廃止として定義しておくが、そのように〈革命〉を位置づけたとき、それはつまりは資本を誰が所有し市場を誰が管理するかという問題になる。社会的な富の管理と分配の問題とは、要するに〈政治〉の問題である。だから二〇世紀の社会主義革命の問題とは、結局、〈政治〉の問題に還元できてしまう。資本や市場の管理する権力を労働者が資本家たちから奪取すれば、資本主義の問題は解決する、というのがその基本テーゼであった。ところがマルクスの理論が問題にしようとしていたのは、そうした〈政治〉もしくは〈権力〉の問題ではなかった、というマルクス読解が、右の三者においては共通の了解となっている。たとえばポストンの実質的な理論的後継者とも言えるホロウェイは、次のように言う。

> 絶え間なき声が、「重要なのは政治なのだから、お前たちの日常的な活動の内容など忘れろ、重要なのは政治だ」と語りかけている。……これは真実ではない。社会の真の決定要因は、国家的なものと経済的なものの背後に隠れている。それはわれわれの日々の活動が組織化されるやり方であり、抽象的労働の、つまり価値、貨幣、利潤の命令への、為すことの従属である。結局、国家の存在の基礎をなすのは、この抽象化である。もしわれわれが社会を変えたいなら、自らの活動を抽象的労働へと従属させるのをやめ、何かほかのことを為さなくてはならない。(8)

これは後にマックス・ウェーバーが「合理性」による生活の支配として、またミシェル・フーコーがミクロな水準でわれわれの生を支配するポリティクスとして問題にしたものを、それらに先立ってマルクスが資本による社会の支配として、より精密に言えば、資本の動態性を可能にしている抽象的な労働もしくは抽象的な時間という形式による社会生活全体の通貫というかたちで、問題にしていたことを指摘している。

こうしたマルクス解釈が台頭してきた背景を大きく言えば、一つには、市場と私有財産を廃すれば健全な社会がやって来るとした社会主義の失敗が二〇世紀を通じて明らかになったからである。社会主義の失敗についてももちろん歴史的現実的な要素が複雑にからむが、しかしその理論的な原因を単純に指摘すれば、近代以降の社会における生産と流通、具体的労働と抽象的労働、交換価値と使用価値との関係を単純に二元論的に捉え、一方から一方を切り離せると考えたところにあると言える。〈政治〉や〈権力論〉の立場とは、つまりはこのような二元論の立場である。だが、ヘーゲル哲学を継承するマルクスの理論はもちろんそのような単純な二元論の水準にはなかったし、だからこそ彼の最後の理論的仕事は〈政治論〉でも〈権力論〉でもなく『資本論』であったと言うことができる。後期マルクスにおいて政治の問題は理論的な課題としてはすでに終焉していた

問題であったし、二〇世紀の政治的革命の失敗経験を経て、ようやくマルクスと同じ地点に社会理論の水準が到達したのである(9)。

2. ポストン理論の現代的優位

ポストン理論の優位点は、「不変資本の蓄積と自由時間」との関係をメインテーマとしてマルクスを読む視点、また「抽象的時間の支配」という資本主義の動態性と全体性とが可能となっているメカニズムの基本原理を発見(もしくは定式化)したことにある。これによって、人類は自分たちの文明のたどる軌道がどのようなものであるかを理解することが可能となった。また、この軌道の制御不能性とそれがもたらす疎外を克服するには、何を克服すれば良いのか(抽象的時間の支配の克服)、何を解放すれば良いのか(歴史的に蓄積された時間の解放)を明らかにしたことは、先にも述べたように、画期的な業績である。政治体制としての社会主義は失敗したが、マルクスの社会理論としての功績はそれとは別の水準にある、ということを明確にしたのである。ここでそのポストン理論の骨子を簡単に確認しておこう。

『時間・労働・支配』においてポストンは「マルクスはプロレタリアートの廃絶を唱えた(10)」「資本主義の矛盾は、流通領域と生産領域の矛盾なのではなく、生産領域内の矛盾である」「マルクスは資本主義的生産様式の基盤である《労働》を批判した」「廃絶すべきは、(交換)価値=抽象的人間労働=抽象的時間による支配である」といったテーゼを唱え、既存のマルクス解釈のほとんどすべてを「伝統的マルクス主義」のカテゴライズのもとに、一括して批判する視点を打ち出している。その骨子は、『経済学批判要綱』からマルクスの《時間論》を抽出し、それをもって『資本論』におけるマルクスの「カテゴリーによる批判」のもつ論理的な含意を明示的に取り出すことである。それによってポストンは、自由放任主義、国家資本主義、新自由主義と三世紀をまたいで表層上の様態変化を遂げながら加速する資本主義のコアにある、変わらない社会支配と動態性のロジックを取り出し、その終焉を予見する。

このポストン理論の核心は、「(交換)価値=抽象的人間労働=抽象的時間」というテーゼにある。抽象的時間という社会形式を人間労働が産出し、かつまたそれによって人間労働が支配されること、その人間労働の自己媒介的な作用によって資本の有機的構成から動態性が発生し、「トレッドミル効果」「変容と再構成の弁証法」(11)による生産の加速度的増大の効果が生じること、さらにその生産における効果が社会全体におよぶ支配をもたらすことが、このテーゼから展開される。

このようなポストン理論には、抽象的時間による支配によって生じる資本主義社会に特有の「生きにくさ」「生活の断片化」「豊かさの中での労働時間格差」といった問題、また地球環境を破壊しながら莫大な物質的富を生産することなしには自己を維持することの出来ない資本主義的経済の暴走性の問題に対する理論的アプローチを可能にしているという大きなアドバンテージがある。現代のグローバル資本主義にも有効な生産の運動方程式の抽出、およびその社会的効果(文化／主体への効果)を理論化しうる基礎論を確立し、「価値論」の可能性をふたたび拡充した功績は、評価できる。

ポストン「価値論」の内実は、次のようにまとめられる。超歴史的な「労働」を措定し、批判の根拠とすることで「伝統的マルクス主義」は、人間労働の疎外とその克服である共産主義革命の理念を構成したが、ポストンによればこれは、資本主義における矛盾を生産領域と流通領域の矛盾として理解する誤読ということになる。そのような読解は、生産領域そのものにおける矛盾と動態性の理論を構成しようとした『資本論』におけるマルクスの論理とは相容れない(12)。この指摘を価値論の文脈に置き換えれば、「伝統的マルクス主義は交換価値へと疎外される以前の『価値』を価値実体として措定している」という批判になるだろう(13)。ポストンによれば、『資本論』において使用価値と区別される「価値」とはすでに交換価値であり、その実体は抽象的時間によって測られる抽象的人間労働である(14)。

商品空間の構成を所与の前提として『資本論』の叙述を読むポストンの解釈は、一方で、それにもかかわらず（というよりポストンに即せば、それゆえにこそ）資本主義の運動の理論的定式化を可能としている点で、日本的文脈に即して言えば、「後期マルクスは疎外論を脱却し物象化論である」という廣松渉的読解を貫徹しているということもできる。疎外されていない価値や疎外されていない人間労働を措定せずして、資本主義の「動態性」と「矛盾」、および「その矛盾の解消とは何か」を理論的に定式化できるロジックを『資本論』から構成可能であることを示した理論的功績は大きい。特にポスト社会主義時代（＝グローバル資本主義時代）における批判的社会理論を構成するための基礎フレームとしての優位性がある。ポストンの視線は商品空間の彼方に向けられているが、商品空間をなんらかの革命手段によって一気に覆そうとする思想の類いを、それ自体が商品空間の効果によるロマン主義的想像力であると一括し、商品空間の転覆ではなくその効果の極大化の果てにしかわれわれの未来はないとマルクスは考えていた、とする徹底した反―疎外論的＝反―二元論的＝反―政治的マルクス読解である、とこれを位置づけることができる(15)。

3．〈ポストン価値論の拡充と主体性論への接続〉という課題

一方で、『時間・労働・支配』における理論構成が含む理論的困難はあるだろうか。私見では、次の三点が指摘できると考える。①、「価値＝抽象的人間労働＝抽象的時間」という物象化もしくは社会的推論形式の成立機制が明らかではない。②、①によって、この構成からの脱却がなされたときの「効果」に関して、多義性が生じる。③、②と連動して、ポスト資本主義社会と主体性との関係について、不明な点が残る。

③の主体性の問題については、『時間・労働・支配』の数箇所において、主体性／主観性についての応用理論がこの書の提供する基礎理論から可能であることが、主張されている。しかしながら私見によれば、ポストン理論を前提として主体性についての理論を構成するには、①②の問題に効果的にアプローチするカテゴリーが必要である。この問題を十分に論じるためには、ポストン理論と伝統的なマルクス主義とのマルクス解釈の違いを綿密に整理する作業のうえに新しいカテゴリーを定立する必要があり、長い手続きが必要となること

が予測されるが、ここで少し、ポストン理論の応用的展開について一つのイメージを提供することを主眼に、ポストン理論の構成を踏まえつつ（すなわち疎外論に後退せずに）、上記三点を克服する方途について、著者の着想も交えて論じてみる。それは〈ポストン価値論の拡充と主体性論への接続〉という課題となる。

『時間・労働・支配』では、「交換価値＝抽象的労働＝抽象的時間」の等式を成り立たせている「社会的必要労働時間」という社会的形態（形式）の成立機制について、踏み込んだ分析がなされていない。いわばそれが成立している社会が資本主義社会の定義である、ということになっている。これは『資本論』読解に留まる限り正しい読解であると言うほかない。しかし「社会的必要労働時間」成立の謎は残る。「社会的必要労働時間」という形式には、資本主義社会の「再構成」の問題に切り込む手がかりがある。私見によれば「社会的必要労働時間」とは一つの社会的な推論形式である。この推論形式によって、主体はみずからを商品として理解し、商品空間に参入する(16)。本書で〈人間労働の自己媒介性〉(17)という表現で言われる事態成立の鍵がここにあるだろう(18)。

『時間・労働・支配』においてポストンは、再三、この理論は主体の歴史的変容を把握するための基礎理論として援用可能であると主張している。しかしそれは同書においては可能性の示唆にとどまる。ポストンの主張の根拠は、時間という形式が主観的な形式でありながら社会的な客観性も有する形式として成立している事実にあるだろう。しかしそれだけでは、つまり、時間形式の成立機制についての議論をオミットするならば、時間形式が理論の前提であり結論となってしまう（カントのカテゴリーと同じくその由来が不明となる）。抽象的な時間形式を構成し、価値に支配される商品空間を成立せしめているのは、人間主体の能力であると考えるほかないが、『時間・労働・支配』においてポストンは、価値による支配の物象性／客観性を強調し、それを主体の能力による効果であるとは言わない。むしろ彼は、主体性が物象化された社会形式の効果であることの方を強調する。しかしながら〈人間労働の自己媒介性〉成立には、人間の意識がもつ反照性／再帰性（reflexivity）が抜きがたく関わっていると考えられる。ヘーゲル哲学の用語では、それは「否定性」の問題となる。この面の考察をオミットしたときに生じる問題は、価値による支配を脱却したときに、われわれ主体に戻ってくるものがどのような「余剰／豊かさ」であるのかが不明となること、である。それは単に余分な時間として戻ってくるのか、それとも新たな関係性であるのか。例えば日本のように資本の有機的構成の高度化が極度に進んだ社会の現状を見ると、仮に「時間の社会的分割」がなされ、余分な時間が増えたとしても、その時間を主体は商品空間の再構成に費やしてしまう危険性はないのか、という疑問が生じる(19)。

この問題に切り込んでいくためには、おそらく抽象的時間の成立を可能にしている人間精神の次元が、主体の再生産ともかかわっていることを示すことが必要になる。そのためには、〈人間労働の社会的性格〉から時間が発生すること、また同時にその性格が消費の欲望に関係していることを示すことが、有用となる。そのためのカテゴリーの追加が、必要となるだろう(20)。「抽象的人間労働」、または「人間労働の社会的性格」は、具体的労働を抽象化した結果であるとも、また同時に、そうした抽象化を可能にする能力そのものであるとも読める。この両義性を読み込んだときに、〈人間労働の自己媒

介性）による抽象的時間の生成という事態を、人間労働の二重性から生じる労働の自己抽象化のプロセスであるとすることでポストン物象化論を補填することが可能となり、同時に、それを主体性の変容を分析する基礎理論に応用することが可能となる、と考えられる。著者は目下、この人間における作用／能力をヘーゲルの「否定性」の概念のもとに考察しようとしている(21)。

4. ホロウェイ——ポストンの理論的後継者

著者とはまた異なった角度からではあるが、ヘーゲルの「否定性」の概念を（アドルノ経由で）基盤とすることで、ポストン理論を批判的に継承するのが、ホロウェイである(22)。ホロウェイの思想と比較することで、ポストンの思想のかたちがよくわかるので、ここで両者を比較考察してみる。

ホロウェイは、資本による全体性（社会全体を抽象的な原理によって貫いていること）と資本の動態的な軌道を構成しているものが「抽象的な労働」であり「抽象的な時間」であるというポストンの理論に同意する。これによって彼は、国家に敵対したり、権力の奪取を目標とするたぐいの左翼運動の政治性のすべてを批判する。国家や官僚の権力は抽象的な支配軸（抽象的時間）の表出に過ぎないので、労働者がそれを奪取することは、労働者が自ら抽象的な社会支配の構造に与してしまうことになり、無効であるとホロウェイは言う。これがホロウェイの「権力を取らずに世界を変える」という書名の意味である。こうした立場をホロウェイはポストン理論を参照しながら示している。権力による支配のさらに背後に抽象的な時間および労働の支配をみること、それにより形作られる資本の構成こそがわれわれの生活を疎外するものであるという知見をホロウェイは、ポストンから引き出している。

しかしホロウェイとポストンには大きな違いもある。ホロウェイの理論は実践的な立場であることを標榜し、ポストンが「理論」の立場にとどまっていることを批判する。ポストンが資本の同一性を打破する視座を打ち出しえず、結果として「理論」の立場にとどまっているのは、彼が資本の矛盾的自己同一性を構成しているのが労働の矛盾的自己同一性であることを見ないからだ、ということになる。

人間労働は確かに抽象的労働を生み出し、それを軸に自らを二重化された労働として構成する。これが資本の二重的構成、すなわち資本の有機的構成を生み出し、この構成を取ることで資本は独自の動態性を得る。この動態性ゆえに資本は自立化する。だが、同時に資本の有機的構成はあくまで人間労働によって構成される。人間がいなければ、資本は構成されない。われわれを縛るものがわれわれ自身であるというところに、最も深い絶望と希望とがあるとホロウェイは言う。「牢獄をつくっているのはわれわれ自身である。それは抽象的労働の産物なのだ。……われわれが自分自身の牢獄を建造しているという事実から、希望と深い絶望の両方が湧き出てくる」(23)。われわれのなすべきことは、われわれの具体的な時間を、抽象的な時間の支配から解き放つことである。このように、資本のもつ矛盾的同一性を労働の矛盾的同一性へと取り戻すことで、逆にそこに解放の可能性を見るというのが、ホロウェイの思想である。

ポストンの一書においては、抽象的労働と具体的労働の超出的な関係についての認識は存在せず、そのため、彼が正しく強調している労働の二面的性質は、その思考過程で、一面性へ、つまり抽象的労働へと還元される。その結果、抽象的労働を越えた活動形式をめぐる展望は、いまある闘争としてではなく、つねに可能性として提示される。この視点が重大な政治的結末をもたらす。それは現在の闘争から切り離された資本主義理論へと（またもや）帰結する。ポストンの伝統的なマルクス主義にたいする批判は、ラディカルな性格をもつにもかかわらず、彼は、その伝統の顕著な特徴の一つである、資本と階級闘争の分離を再生産している。(24)

ホロウェイによれば、階級闘争は資本そのものの中にあり、そしてその資本における階級闘争は、そのままわれわれ自身の内部における闘争である、ということになる。すなわち、資本主義下におけるわれわれの生活、およびわれわれ自身の内部に、資本主義的な時間と非—資本主義的な時間、資本主義的な交換価値に従属した行為と、非—資本主義的な行為とが、ともに存在している。たとえ社会の中心が資本主義によって支配され、その駆動原理である抽象的時間に覆われていたとしても、われわれの生活のすべてが抽象的時間によって浸透されつくしてしまうことはあり得ない。ホロウェイにおいて「物象化」とは、抽象的時間によって計測される「労働」によってわれわれの生活が覆われていくことを意味するが、この物象化のプロセス、すなわち抽象的時間による支配は、かつて起こり、すでに歴史の決定的な一頁となってしまったような出来事ではなく、つねにいまここで起こりつつあることである。われわれの日々の資本主義的生活は「為すこと」（doing）、すなわちわれわれが資本主義的な交換価値の外で行っていることを、われわれ自身が抽象化し「労働」へと変換することによって成り立っている。したがって、課題は、「労働」から「為すこと」を取り戻すことである。これがホロウェイの主張である。

ポストンの理論的立場に対して実践的立場を唱えながらも、同時にマルクス＝ポストンの〈労働＝資本の二重性〉の思想を継承するホロウェイの理論は、ポストンの批判する二元論の地平はもちろん克服している。「世界は二重の次元から成っている」と同時に、ホロウェイのねらいは「否定性を強めること」であり、ヘーゲル＝アドルノから彼が継承した「否定の思想を具体化し、資本主義に対するマルクス主義的批判をより鋭いものに研ぎ澄ま」すことであると述べられている(25)。哲学者ではないホロウェイは、〈二重性〉と〈否定性〉との関係について厳密に概念的な説明を施していないが、彼の叙述が含意しているのは、（近代以降の）世界の二重性を構成しているのは、人間主体のもつ否定性という性質であり、それが資本の二重性、およびそこからもたらされる動態性を構成しているということである。この資本の二重性と動態性は「資本の有機的構成」（＝不変資本＋可変資本）という形式によって構成されているが、人間労働の側面から見れば抽象的労働と具体的労働（有用労働）という二つの次元に現れている。そして、ここが重要なところだが、そもそも資本の弁証法的な動態性は人間労働の弁証法、つまり人間労働の二重性からもたらされている。資本の運動の原因が人間にあるのであれば、われわれ人間はそれを止めることができるはずだ、とホロウェイは考

えている。ただし、ホロウェイはそれを「止める」というような簡単な言い方では言わない。かわりに彼は、われわれの日々の生活の中で現れる「否」、すなわち抽象的労働および抽象的時間になじめず、それに抵抗する「叫び」にわれわれ人間の否定性が現れていることを捉え、重視する(26)。

ホロウェイの理論の基本ロジックは、〈抽象的時間による支配〉という概念が成り立つのであれば、抽象的時間によって支配されるところのもの、すなわち〈具体的時間の現存在〉という概念が成り立たなくてはならない、というところにあるだろう。ここにホロウェイによるポストン批判の最大の要点がある。たしかにポストンは、ホロウェイの言うような意味での、つまり資本主義的な抽象的時間に包摂されていないわれわれの生そのものというような意味での「具体的時間」という概念は持っていない。ポストンに「具体的な時間」という用語はあるが、それは「歴史的時間」という概念に置き換えられて、『時間・労働・支配』の後半に登場する。ポストンにおける「歴史的時間」とは、不変資本のかたちで蓄積された人間労働（労働時間）およびその蓄積過程の加速率（生産性の向上率）を指す(27)。ポストンにおいても、この「歴史的時間」の解放こそが、資本主義の超克を意味する。だが一方で、ポストンが同書において取る基本的な立場は、先にも述べた通り、二元論的認識の一貫した排除である(28)。抽象的時間によって支配されているところの具体的な時間があり、それこそが抽象的な時間に対する抵抗の拠点となるという理論を認めれば、具体的な労働こそが抽象的な労働に対する抵抗の拠点となるという図式を認めることになってしまい、解放されるべき「人間労働」を措定する「伝統的マルクス主義」の理論に逆戻りしてしまうとポストンは考えるのであろう。ポストンは、抽象的時間と歴史的時間とが糾える縄のように相互作用することによって存在していることを強調する。この〈二重性〉の思想は、マルクスが資本論第一巻刊行後にエンゲルスへの手紙で自分の本の中の最良の部分であると強調し、かつ実際に『資本論』の叙述を商品の二重性、労働の二重性から始めていることに現れていることから、ポストンが資本の弁証法を理解するための基盤としている思想である。〈二重性〉の思想と二元論とは全く異なることが、理解されなくてはならない。抽象的労働に対する具体的労働はもちろん存在するが、それは抽象的労働との関係においてのみ存在するのであって、いつの時代にも変わらずに存在する具体的人間労働そのものというような抽象的な労働一般は存在しない。このように考えるのが、〈二重性〉の思想である。現在のわれわれが為している具体的労働は一〇〇年前の具体的労働とはまるでちがう。したがって、われわれが抽象的労働から解放して、そこにわれわれ自身を回帰せしめることが可能な、疎外されていない具体的労働そのものなど存在しないということになる。

ポストンは「生産内における矛盾」にとどまることを強く主張するが、その前提には伝統的マルクス主義および現存社会主義の歴史的失敗への批判がある。二〇世紀を通して、価値に支配されていない純粋な自然との物質代謝としての「労働」をその理念の根底に据え、市場と私有財産を廃すれば健全な社会がやって来るとした社会主義の失敗が明らかになった。社会主義の失敗についてはもちろん歴史的現実的な要素が複雑にからむが、しかし理論的な水準でその原因を指摘すれば、近代以降の社会における生産と流通、具体的労働と抽象的労働、交換価値と使用価値との関係を二元論的に捉え、

一方から一方を切り離せると考えたところにあると言える。ポストンはこの二元論が、矛盾的自己同一という資本の本性を捉えていないことを批判し、それが社会主義および伝統的マルクス主義の失敗の源となったことを指摘する。だがその際にポストンは、伝統的マルクス主義が「労働」概念に依拠し、労働者を革命主体と捉えたことの過誤を強調するあまり、矛盾的自己同一の構成を有するのは資本のみであるというロジックを構成してしまった。ここにはマルクス自身の最後の叙述である『資本論』が、主体としての資本の分析に徹したことも影響しているだろう。このことによってポストン理論は、あくまで「生産領域そのものにおける矛盾」というテーゼに固執する結果となっているが、そのことが理論の適用範囲を狭めている面がある。資本と労働、生産と消費との相互浸透の相において問題を捉えなければ、われわれの主体性の問題（疎外と再生産）は解けない。この点、ホロウェイの理論は、資本と労働の相互浸透について否定性を鍵として理解している点が、アドバンテージとなるだろう。

5. 資本の有機的構成という呪縛

突き詰めれば、ポストンの思想とは「すでにわれわれは変わってしまった。変わる以前のわれわれに戻れると考えるのは幻想である」という立場であるように思われる。そしてたしかに、後期マルクスの思想には、ポストンが唱えるような、われわれは資本主義の根底的な転覆を計るのではなく、もはや資本主義の先へと突き抜けるしかない、という達観した思想のトーンがあるように思われる。それはすでに『ドイツ・イデオロギー』における「資本の文明化作用」についての認識に表れている。抽象的時間の支配を解除し、資本の有機的構成を解除すること、これが仮に可能だとして、もしそれが現時点で成されるとするならば、その帰結は文明の崩壊もしくは放棄となることは、容易に予測できる。少なくともようやくグローバル時代に到達したわれわれの文明はまたローカルな諸文明の併存あるいは競合状態に戻らざるをえないであろう。同時に、そこからまたグローバルな覇権を再び獲得しようとする文明が現われることをどのように抑制すればよいのかも、不明である。ポストンの思想において土台となっているのは（これはネグリにも共通する点であるが）、われわれは積み重ねてきた文明の成果を放棄するべきではなく、そのうえに新しい文明の形を探ろうという考え方である。これには理性的な説得力があるし、また後期マルクスの思想に沿っているのもたしかである。ポストンはたんなる自然／古代回帰論は拒否するし、またそうした回帰論が発生するメカニズムまで、〈時間による支配〉の一元性から説明する(29)。

だがその一方で、ホロウェイが批判する通り、ポストンの理論は結果として、資本の一元性に陥ってしまっている感があるのは否めない。この理論は、（ポストン本人の思想の全体や将来の構想如何に関わらず）少なくとも『時間・労働・支配』の叙述に即して受け取るならば、やはり資本が主体となってしまっているとの批判を免れないだろう。それについては、おそらく『資本論』がマルクスの最後の仕事となったことにも、原因があるだろう。この意味でポストンは、マルクスの最晩年の仕事の構成と方向性に忠実である。いずれにしても「矛盾は生産における矛盾である」と言い、その生産の軌道が問題であるとしたときに、矛盾はあくまで資本における自己矛盾であるこ

ととなった。だが同時にポストンは、資本は矛盾を抱え、それをみずから高めていくにしても、みずからそれを解消することはないという。すなわち自動的に矛盾が解消されることはないという立場を取る。この立場と、それでも解放はありうるという主張とのあいだの溝をポストンは埋めていない。それを安易に埋めないことが、マルクスの著述に忠実な理論的解釈の仕事であるとのスタンスをポストンは堅持している。

ポストンとホロウェイは〈二重性の思想〉を共有するにもかかわらず、なぜ一方は主体から自立する客観的構造としての資本を強調する立場となり（ポストン）、一方は資本を可能にしている主体の弁証法的構成を強調する（ホロウェイ）といったように、異なった立場に立つことになるのだろうか。詳細な論考は別の機会に譲るとして、ここではごく簡単に筆者の考えを述べておくが、そこには「矛盾」と「動態性」についての考え方のちがいがあるように思われる。

ポストンの著作には、哲学的な言い方で言えば、「〈矛盾〉が構成されるためには〈統一〉がなくてはならない」という思考が貫かれているように思われる。この統一＝全体性への執着が資本の一元性とも指摘されてしまう彼の思想をもたらしている。いわばヘーゲル的な、矛盾的自己同一の思想とも言える。正確に言えば矛盾的自己同一という言い方自体が、哲学的な概念としてはすでに冗長である。ただ差異があるだけでも統一があるだけでも、差異も統一も意識はされないのであって、差異と統一の統一という事態があって初めて差異も統一も意識されるのであり、そうした事態の全体を〈矛盾〉というわけである。もちろんポストン自身はそうした哲学的な概念の整合性に固執して〈統一〉を貫いているわけではないだろう。彼が考えているのは、先にも述べた通り、資本の動態性をもたらしているのは、この抽象的時間による全体的な統一の作用であり、この全体性はもちろんわれわれの生活を「支配」するものであるけども、これが歴史の動因であり、文明の構成要因である以上、われわれはこれをただ廃棄することはできず、これを突き抜けるしかない、ということであると思われる。ポストンは資本の動態性がもたらす文明化作用を捨て去ることはできないと考えている。彼が待っているのは、不変資本として蓄積された人間労働の成果、すなわち凍結された「歴史的時間」が解凍されるときである。しかしいつどのようなかたちでもたらされるのかは、わからない。ただ〈資本の有機的構成〉を捨て去ることはできないし、それがマルクス自身の後期の思想であったという解釈を、ポストンは貫いている。

一方で、ホロウェイの思想に見られるのは、〈統一〉を打ち破る〈否定性〉の強調である。彼の考えは（彼自身は否定しているが）アナーキズムに通じるところもあると言われ、近代性を相対化する考え方、あるいは近代性をわれわれは捨て去っても良いという考え方を有しているように思われる。ポストンとの思想的スタンスの違いは、この近代性を突き抜けるしかないと考えるか、それとも捨て去ってもよいと考えるか、という考え方の違いから発しているだろう。ホロウェイの実践的主張は、われわれはわれわれ自身が日々、抽象的時間と抽象的労働による支配を生み出していることに気付くべきで、そのことによって「なすこと」（doing）を基盤とした生活スタイルに戻るべきだということである。しかしそれが具体的にどのようなことであるのかは、結局は不明である。これについても彼は、具体的なプランや予言を示せば、それはすでに「否定性」の思想ではなくなるというよ

うなロジックを使っているが、これは妥当だろうか。そしてホロウェイの最大の欠点と思えるものは、文明論的な視点で考えたときの問題が、踏み込んで考えられていないように思える点である。〈資本の有機的構成〉および〈抽象的な時間による支配〉の全体性を解除したときに、われわれは文明を維持することは可能なのか、という問題である。比較すると、ポストンおよびネグリは、基本的に不変資本の蓄積がわれわれの解放をもたらすという『経済学批判要綱』におけるマルクスのビジョンに従っているので、これについての態度は明確である。

ポストンの〈ロマン主義批判〉をホロウェイが躱すことができているかも、もう一つの重要な問題である。ポストンは資本による全体性に対する反作用として、ロマン主義的な発想が生まれることを指摘している(30)。ポストン自身は、この点を大きく展開はしていないが、これは成熟した資本主義社会であり、かつ労働力の移動が滞ることで資本の有機的構成の高度化が極まっている日本のような社会で、たとえばサブカルチャー的な想像力（クールジャパン）が興隆する原理を説明する理論として、応用可能であると思われる。すなわち資本の有機的構成から可変資本（労働力）としては排除された主体が、それでもその否定性（＝想像力）を文化商品の消費というかたちで商品空間にトラップされ続けるというモードである。このことによって、本来、社会的・歴史的な想像力として発揮されるはずの人間の否定性の力が文化消費に費やされ、他方では「希望のなさ」が経験されるという現象が起きているのではないか(31)。このようなかたちでの否定性の消費という現象こそ、高度資本主義が極まった社会において〈資本の有機的構成〉が発揮する呪縛の形態の一つであろう。ホロウェイを読んでいて感じるのは、先駆的症状としての日本の文化的状況などが視野に入っていない点である（こうした傾向はネグリも同様である）(32)。そこには否定性がサブカルチャー的想像力に吸収されてしまうという事態への認識がない。もちろんポストンにもそうした指摘は直接にはないが、しかし彼のロマン主義批判こそが、ホロウェイの強調する「否定性」の思想をより一段と鍛えるものになるはずである、と両者の関係を結ぶことは可能であるように思われる。

6. ホロウェイのネグリ批判

本論考は、主題である「時間の支配」についての筆者の研究の途上で書かれているので、結論については開放系で置くことしかできない。論としてのバランスをいっそう崩すことにはなるが、読者の思索に貢献することを考えて、最後にホロウェイのネグリ批判に簡単に触れておくことで、ネグリの理論のポジションを理解するための補助線を提供したいと考える。

『時間・労働・支配』の訳者解説でも指摘した点であるが、ネグリは「資本の有機的構成」というマルクスが最後に到達した理論的認識を拒絶する。あるいはより正確に言えば、ネグリは資本の有機的構成の成果だけは受け取るが、その構成の存続は否認する。比較すると、ポストンの場合は、〈不変資本の蓄積による自由時間の解放〉という『経済学批判要綱』におけるアイデアと〈資本の有機的構成の高度化〉という『資本論』の基本理論とを接合したマルクス解釈となっており、後期マルクスを統一的に解釈する理論とし

て、優れている。しかしネグリはこうしたポストン的な意味での統一的解釈は拒絶し、『資本論』のマルクスを否定して『経済学批判要綱』のマルクスに遡行することを唱えるのである(33)。

ホロウェイの批判によれば、ネグリは資本と労働者とをわけて考えてしまう古典的な二元論から抜け出せていない(34)。ネグリの基本ロジックは、資本によるグローバルな支配が増大しているということは、それに対抗する労働者の存在が以前にも増して高まっている証拠だ、というものである。彼の「帝国」論は、新たな支配の形態であるグローバルな「帝国」が現れつつあるのは、もはや国民国家によっては統制できないグローバルな主体である「マルチチュード」が現れつつあるからだ、ということになる。こうした考え方は、これは彼がスピノザの実体論を哲学的な基盤としていることに淵源があるが、要するにそれは、資本と労働者とをぶつかりあう二つの実体として捉える「肯定性」の思想なのだ、とホロウェイは指摘する(35)。アウトノミア運動の思想を継承するネグリにおいては、労働者がつねに実在的で肯定的な存在であり、資本が観念的で否定的な存在であるというかたちで理解されている。新しい世界秩序が現れつつある今こそ、われわれが新しい無秩序として現れつつある時なのだ、というネグリのロジックは、彼の弁証法にたいする執拗な批判にも拘わらず、かえってもっとも質の低い弁証法の使い方、Aの存在が非Aの存在を証明する（あるいはその逆）、というたぐいの稚拙な用法（外的な相互転倒という悪無限）に陥ってしまっている面があると言わざるを得ない。これは支配秩序を指さして、あれは本当はわれわれのものだと言っているだけのことで、支配秩序を〈肯定〉するだけのことにしかならない、というのが、ホロウェイによるネグリ批判の本質である(36)。つまりネグリの肯定している「マルチチュード」なるものの運動は、グローバルな資本の運動の言い換えに過ぎないのである。

筆者の理解するかぎり、ネグリはマルクスの「資本の有機的構成」の概念を、誤解している。彼の有機的構成は否定性によってではなく肯定性によって理解されたものであるので、次のような理解になる。有機的構成の高度化、すなわち可変資本の相対的な不要化と不変資本の蓄積の増大によって、資本は有機的構成を維持できなくなるし、その構成はますます生産にとっての足かせになるはずだ、というわけである(37)。「労働と資本との開かれた社会的関係」(38)を彼は唱えているが、これは資本と労働の双方を実体論的に考えすぎている。彼の理論が唱えるのは基本的には資本からの離脱であるけれども、資本と労働との相互浸透を捉えることができておらず、われわれ自身が日々資本を構成しているからこそ問題の根は深いのであり、同時にそこにこそ希望がある、というホロウェイの否定性の思想の水準には及ばないと言えるだろう。またネグリはマルクスの抽象的労働を「非物質的労働」に置き換えてしまい、それをITテクノロジーを基盤とする「経済の情報化」、また人間の相互作用や情動に関係した「サービス産業化」のことだと解釈してしまう(39)。ここにも彼が「資本の有機的構成」（＝可変労働と不変労働との浸透的相互作用）の考え方を理解していないことが現れている。

ネグリは資本による統一＝全体性を否認するが、それは肯定性の思想によってである。「特異性」というスピノザのタームで彼はその思想を表現するが、要するに、労働者を肯定的な実体的存在として捉えることによって、資本に対抗させるわけである。もちろん彼も「労働者」の存在が資本と相即的であるというマルクスの認識をよく理

解している。だからこそ、マルクスに依拠せずに、スピノザに依拠して、それを「マルチチュード」というタームに置き換える。ホロウェイも資本の同一性を拒否するが、それは否定性によってである。肯定性による同一性の拒否と、否定性による同一性の拒否について、どちらが批判的思考として優位であるのかが思考されなくてはならないだろう。本格的な論考は別の機会に譲るが、筆者は、肯定性の思想で資本の有機的構成の呪縛を振り切ることはできない、と考えている。肯定性の思想の有効性は、せいぜい個人の倫理としてのそれにすぎないものだろう。そのような倫理的態度は、否定性によって構成される全体性の中で、全体性を見て見ぬふりをしている態度であると言える。肯定性の倫理は、全体性に対する一つの反応ではあることは確かだが、全体性に対する責任は拒否する態度であるため、批判性を欠いたものとなる。ネグリ／ハートにおける「愛」や「聖人」の概念の唐突な登場には当惑を禁じえないが、肯定性の思想の無批判性がそこにはよく現れている(49)。

7. むすび

ネグリが肯定性の思想によって資本の否定性を振り切ろうとするとき、彼は統一の作用が否定性によるものであることをよく理解している。だがその否定性は、われわれ人間の発揮しているものであることを忘れてはならない、とホロウェイは警告する。資本の自己運動は自己運動であるにも拘わらず、われわれの否定性によって駆動されている。それはわれわれの自己運動でもある。ホロウェイの理論にはしかし、この自己運動を止めるための具体的な方策が欠けている。それはわれわれがもっている否定性が資本を駆動する否定性に変換されてしまうメカニズムの分析がないからである。「抽象的な時間」に対して「具体的な時間」を唱えるのはいいが、両者の関係性と「否定性」との関係性の厳密な定式化がそこには欠けている。〈具体的な否定性〉が〈抽象的な否定性〉へと変換されて、〈抽象的な時間〉を生み出す仕組みの分析が、「具体的な時間」への遡行もしくは取り戻しのために必要なのではないかと考えられる。それにもかかわらず、ホロウェイによって人間主体の否定性が資本の運動に寄与していることが明らかにされたことには、意義がある。このことはポストンが言っていなかったことである。同時にポストンの理論によって、「抽象的な時間」という形式が資本の有機的構成を可能にし、動態性を生み出すことが明らかになった。ポストンの理論では、「抽象的な時間」の生成は歴史的事件として扱われている。しかし「抽象的な時間」の主観的かつ客観的な（いまここでなされている）再生産のメカニズムの分析こそが、欠けているもう一つのピースである。ポストン、ホロウェイ、ネグリの三角形から浮かび上がるこの問題へのアプローチを得たとき、おそらくわれわれは有機的構成が主観にもたらす呪縛と主観が有機的構成を構成することとの関係を素描することができる。このピースをはめ込むことで完成する下図の上に、ネグリ／ハートが試みたのと同じ地理的・歴史的規模で、資本の有機的構成のグローバルな現状についての分析図を実証的に構成していく作業が可能ではないか、と考えている。

【註】

(1) John Holloway, Crack Capitalism, Pluto Press, 2010, p. 166.

(ジョン・ホロウェイ『革命――資本主義に亀裂を入れる』高祖岩三郎・篠原雅武訳、河出書房新社、二〇一一年、二〇五頁)

(2) Michael Hardt and Antonio Negri, Empire, Harvard University Press, 2000.(アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート『〈帝国〉――グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲ほか訳、以文社、二〇〇三年)

(3) David Harvey, The Limits to Capital, University of Chicago Press, 1982.(ディヴィド・ハーヴェイ『空間編成の経済理論――資本の限界(上・下)』松石勝彦/水岡不二雄訳、大明堂、一九八九年)

(4) Moishe Postone, Time, Labor and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory, Cambridge University Press, 1993(モイシェ・ポストン『時間・労働・支配――マルクス理論の新地平』白井聡/野尻英一監訳、筑摩書房、二〇一二年)

(5) たとえば高島善哉や杉本栄一によって、戦後まもない一九四〇年代にすでに「価値論の復位」が唱えられている。杉本は価値論を、経済社会を統一的に把握する原理であるとし、マルクス経済学の優位点であると述べている。高島は、経済学研究が現象の記述にとどまり本質の洞察を放棄しつつある状況を、社会的理性批判の欠如であると述べている。「例えば価値論なくして完全雇傭の問題が取扱われるか、色々の人が色々のことをいっているが、目先の対策に関する議論が多くて、どうもピンと来ないものがある。これは、つまり現代社会の全体認識という理論的立場がはっきりしていないせいだと思います」(高島善哉『価値論の復位』こぶし書房、一九九五年、二二〇―二二一頁、渡辺雅男による『解説』より)。高島の価値論はもちろんポストンとは歴史的位置も内容も異なるが、価値論こそがマルクスの思想の文明論的な意義の中心であるとする問題意識、価値の問題こそが社会全体の方向性を見定めるための急所であるという確信には、ポストンとの相同性がある。

(6) 代表作『帝国』も含めネグリの著作にはマイケル・ハートとの共著が多いが、本論考ではマルクスの『資本論』および『経済学批判要綱』の解釈や、時間、否定性といった理論的主題についての思想的スタンスは主にネグリに帰せられるであろうとの判断に基づいて、ハートの名前を併記しない場合がある。

(7) この三者の比較を簡単に示しておくと、まずポストンとホロウェイはマルクス『資本論』の解釈について土台を共有していると言えよう。ホロウェイのほうがポストンの時間論的なマルクス解釈に依拠している。しかし資本の動態性と社会支配を本質的に構成しているのは人間主体であると考えることで、ホロウェイはポストン理論における資本の支配の全面性に対して異論を唱えている。またホロウェイはポストンの二重性(人間労働の二重性、商品の二重性、資本の二重性)の思想を採用しており、両者いずれとも、マルクスの「資本の有機的構成」概念における、資本と労働との浸透的な相互作用を重要視している。両者の差異は、ポストンが不変資本の蓄積の上における人類の解放(=自由時間の解放)、すなわち資本の有機的構成の高度化の効果を突き抜けた先の自由を考えているのに対して、ホロウェイは突き詰めれば、資本の有機的構成の解除による自由を考えている点にある。一方、ネグリの場合には、『資本論』における有機的構成の概念を資本の肯定的自立化を認めてしまうものだとして拒否する。ネグリにおいても、資本の有機的構成は解除されるべきものであるが、それはいずれにしろ、不変資本の蓄積によって自然に消失するものと考えられている。その結果、資本の有機的構成から解き放たれた非―労働者である新たなる主体(マルチチュード)が立ち上がるとネグリは考えている。

(8) Holloway, op.cit., p. 133.(邦訳書、一六九頁)

(9) もちろんここで言われていることは、政治の問題そのものの消滅ではないし、その重要性の否定でもない。利害調整およびイデオロギーの問題としての政治の問題は常に残り続けるだろう。しかしそれは、われわれの文明を駆動するメカニズ

ムの本質ではなく、その現れの一つにすぎないとマルクスが認識したことを指している。

(10)『資本論』第一部刊行（一八六七年）後の、一八七〇年代以降も共産主義運動を支援し続けた（『フランスの内乱』一八七一年、「ゴータ綱領批判」一八七五年など）マルクスの活動、発言を踏まえるならば、このような言い方は問題となろう。ポストン自身の表現はより慎重であり、「『資本論』の論理の展開はプロレタリアートの廃絶を含意している」等の言い方をしている。以下は筆者の解釈であるが、第一に、共産主義運動を支援し続けた、歴史的状況の制約の中にある実存的マルクスと、資本主義のコア・ロジックを把握しようとしていた理論家マルクスとを区別することが可能である。少なくとも『資本論』のロジックに即せば、プロレタリア革命は示唆されていない、ということが言える。第二に、それと矛盾しないかたちで、マルクスは「プロレタリア独裁」を資本主義から共産主義への移行期に必然的に生じる「現象」であると見て支援しているのであり、共産主義社会実現のための十分条件として見ているのではない、とする解釈が可能である。一八七〇年代は、自由主義段階から独占資本主義（帝国主義）段階への移行期であり、資本の集中に伴って、労働者の側の結束も起る。そのように、階級闘争を資本の運動の展開に伴って生じる「現象」としてマルクスは理解していた、とする解釈である。この点については、さらなる検討の余地がある。

(11)「トレッドミル効果」「変容と再構成の弁証法」は『時間・労働・支配』第八章において提示される概念。価値（抽象的労働、抽象的時間）の次元と使用価値（具体的労働、物質的富）の次元との相互作用によって生み出される動態的な効果のこと。物質的な次元での生産性が向上しても、それは抽象的な時間によって測られるため、時間単位の密度は実質において高まるにもかかわらず、時間単位そのものは表面上は変化しない。これによって生産の加速度的な増大が惹き起こされる（トレッドミル効果）。また資本主義社会は見かけ上、さまざまな形態（自由主義、国家資本主義、官僚制福祉国家等々）を取りながらも、変わらないコア・ロジックを再編成し続ける（変容と再構成の弁証法）。「この動態性の特異性は……、そのトレッドミル効果である。生産力の向上は、単位時間ごとに生産される価値量を増大させるが、それはこの生産力が一般化されるまでのことである。一般化されてしまった時点では、同じ時間で生み出される価値量は、その抽象的かつ一般的な時間規定のために、以前のレベルへと反落する。このことは、社会的労働時間の新たな規定と生産力の新しい基礎レベルの出現を帰結する。こうして現れるのは、変容と再構成の弁証法である」（Postone, op.cit., p.289. 邦訳書、四六三頁）。

(12) 論理的含意からしても、現実態の理解の面から言っても、矛盾を同一領域における矛盾とすることは妥当である。異なった領域相互間における齟齬や軋轢を「矛盾」と言うことは出来ない。その意味で矛盾とはつねに自己矛盾である。しかし流通領域が生産領域に浸透することによって、矛盾的な領域としての資本主義的生産の構成が生じる、という言い方をすることは、ポストン理論においても可能であると思われる。

(13) 宇野弘蔵はこの伝統的マルクス主義の理解に則り、それ（人間労働を価値実体として措定すること）をマルクス自身の誤謬であると解釈する。一方、ポストンによれば、価値の実体は確かに人間労働であるが、そこで言われる価値は現象としての交換価値であり、その現象の実体は人間労働である。現象としての商品の交換価値の実体が人間労働であることを理解するためには、生産領域の分析が必要であることをマルクスは『資本論』で主張する。交換価値とは実は抽象的人間労働であり、そのような価値の成立は資本主義的生産領域においてのみ可能であるという『資本論』の視角は、人間労働が時間として計測されていることを前提として初めて成り立つとポストンは考えている。ポストンの立場に立てば、資本主義においては、人間労働はすでに交換価値であり、疎外されざる価値実体で

はない。疎外されていない人間労働というものは、存在しない。

(14) 現象としての交換価値の実体が人間労働であることを理解するために、流通の領域ではなく生産の領域へと入っていくことが必要だという論理展開で、マルクスは『資本論』第一部を構成している。そのために第一部「資本の生産過程」の第一章「商品」第一節において、「価値を形成する実体」は「労働の分量」つまり「労働の継続時間」であると言明している。したがって、日本のマルクス主義において「常識」とされる、価値の実体が人間労働でありその形式が交換価値であるという、価値と交換価値とを区別し、交換価値と価格とを同一視する理解は、ポストンにおいては「伝統的マルクス主義」的誤謬として批判の対象となる（これについては二〇一二年一〇月二一日に専修大学で開かれた「現代史研究会」の場で、伊藤誠氏により、日本の伝統においては価値と交換価値は区別されるが、欧米においては区別しないことが常識であるという彼我の違いのあることが指摘された）。価値―交換価値―価格の三者間（仮にそれが二者ではなく三者であるとしてだが）における線引きの位置が異なることに注意が必要である。ポストンによれば、価値とは交換価値であり生産のカテゴリーである。そしてそれと区別されるのは、価格であり、これは『資本論』第二部以降で論じられる流通領域のカテゴリーである。

(15) このポストンのマルクス読解のポジションは、「マルクスはプロレタリアートの廃絶をこそ目指していた」というテーゼに集約されていると言えよう。疎外されざる主体性の存在を認めないことによって、革命的主体の可能性の否認にまで至った思想と受け取ることもできる。この点について批判を展開する余地はあるだろう。たとえば本論考の後半で論じるように、ポストンの〈時間による支配〉論を理論的に継承しながらも、否定的、批判的主体については異なった考え方をホロウェイがしている。偶然にもポストンと同じシカゴで、しかしポストンより一世代前に活動したラーヤ・ドゥネイエフスカヤ（Raya Dunayevskaya, 1910-1987）は、マルクーゼより早くすでに一九五〇―六〇年頃に『経済学批判要綱』の重要性に着目し、なおかつヘーゲルの「否定性」の概念を援用して後期マルクスを読み込もうとしている（Raya Dunayevskaya, The Power of Negativity: Selected Writings on the Dialectic in Hegel and Marx, Ed. Peter Hudis and Kevin B. Anderson, Lexington Books, 2002）。ドゥネイエフスカヤも、資本主義における矛盾の源泉は人間労働の二重性にあると考えているが、（ポストンとは異なり）それだからこそ、資本主義の超克も人間主体によって可能であると考えている。ドゥネイエフスカヤの思想を人間主義的マルクス主義（U.S. Marxist Humanists）として継承するピーター・ヒューディスは、論文「主体の死の死」においてポストンを批判している（Peter Hudis, The Death of the death of the Subject, Historical Materialism, volume 12:3, pp.147-168.）。ポストンにおいては、人間主体が資本主義を超克する主体足りうることは出来ないと事実上断定されているがその理論的根拠が不十分である、とヒューディスは指摘する。また『資本論』第一部のパリ・コミューン以後の改版における叙述や構成の変化（アソシエーションへの言及）に着目することを促している。日本においては、たとえば宇野弘蔵と梅本克己との論争（『社会科学と弁証法』こぶし文庫、二〇〇六年［岩波書店、一九七六年］）において、梅本は次のような問題提起をしている。すなわち、資本主義の矛盾とは、「資本主義の自己運動の原動力としての矛盾」なのか、それとも「資本主義の没落の必然性を基礎づける矛盾」なのか。この問題意識に則ってみれば、矛盾があるからといって、そのことが即ち矛盾の二つの契機の切断可能性を意味するわけではない。また、この矛盾を解消することは、両契機の消失を帰結する可能性もある。この問題を解くためには、矛盾が成立しているのはいかなる場においてか、という問題が解かれなくてはならない。梅本克己は、それを「主体」に求めた。これはホロウェイ／ドゥネイエフスカヤ／ヒューディスの問題意識と重なる。

(16) ポストンにおいては必ずしも明示的、自覚的に示されているわけではないが、

彼の理論には、時間を一つの「推論形式」とみなすこと、さらに時間的な推論が社会支配を及ぼすという洞察が含意されていると解釈することができる。これは哲学的にきわめて興味深い発想であり、この点も『時間・労働・支配』の含む可能性のひとつである。

(17)『時間・労働・支配』第四章、特に「4 抽象的労働と社会的媒介」を参照。「労働とその生産物は、資本主義においては自己自身を媒介する」(Postone, op.cit., p. 150. 前掲邦訳二五〇頁)。

(18) 著者は、この問題を論じるために、ヘーゲルにおける「否定性」と「推論」についての思想を援用することが必要と考えている。それは、本書の〈生産〉についての理論をベースとした上で、主体の再―生産の現場としての〈消費〉の問題を論じることにもなるだろう。注二〇も参照のこと。

(19) この問題はすでに、ポストンのドイツ留学時の指導教授であるイーリング・フェッチャーが一九六八年に来日講演を行った際にも、次のようなかたちで先取りされて論じられていた事実があり、興味深い。加藤尚武の記録によると、資本主義体制内における労働時間の大幅短縮は疎外労働からの解放によって積極的意味を持つであろうと語ったフェッチャーに対して、相原茂が反論したとある。「相原教授は余暇時間そのものが資本主義的に編成・組織・管理され、たとえばレジャー産業という形で体制内在化される以上、労働時間の短縮がそのまま人間解放としての意味を持つというのは楽観的に過ぎる見方だと食い下がったのである」(イーリング・フェッチャー『ヘーゲル――その偉大さと限界』座小田豊・加藤尚武訳、理想社、一九七八年、巻末『解説』より)。ポストンの時間論的な『資本論』読解にはフェッチャーの影響もあると考えられる。

(20) この課題について筆者は、二〇一一年にシカゴ大学でポストンの主導によって開催されたカンファレンス(Critical Historical Studies Conference)において発表している(Eiichi Nojiri, Negativity, History, and the Organic Composition of Capital: Toward a principle theory of transformation of subjectivity, Critical Historical Studies Conference, The Franke Institute for Humanities, University of Chicago, December 3, 2011.)。またその発表を元として国内で発表した論文に以下のものがある。野尻英一「否定性、歴史、資本の有機的構成――主体性変容の原理論のための試み」『社会理論研究』第一四号所収、社会理論学会、二〇一三年。筆者の試みは、二〇世紀のヘーゲル解釈において拡充されたヘーゲルの「否定性」のカテゴリー(人間的欲望の次元・同化の次元[コジェーヴ]、交感の次元[バタイユ]、ミメーシスの次元[アドルノ]、想像的なものの次元[ラカン])を使用し、ポストン理論と接合しようとするものである。

(21) 注二〇を参照。

(22) ポストンとホロウェイの理論的な継承関係についての指摘は、日本では本論考が初ではないかと思われる(英文記事では以下のものが、ポストン、ホロウェイ、ピーター・ヒューディス、ラヤ・ドゥネイエフスカヤの関係に論及している。Paul Blackledge, "In perspective: John Holloway", International Socialism: Issue 136 [http://www.isj.org.uk/index.php4?id=847], 2012)。ホロウェイは二〇〇二年の『権力を取らずに世界を変える』(John Holloway, Change the World Without Taking Power, Pluto Press, 2002)ですでに、「時間の均質化」「資本主義の時間」「足踏車(トレッドミル)の時間」等の概念を使用しているものの、まだこの書物ではポストンの名は出していない。時間論に関して参照されているのは、E. P. Thompson と Richard Gunn である。二〇一二年の『革命』では、ポストンの『時間・労働・支配』を本文および注において頻繁に指示・参照しており、自己の主張の理論的支柱としてポストンの(時間の支配)論を採用していることが明らかである。本文中においてポストンを直接論じているのは、次の箇所。Holloway, Revolution,

pp.187-188.（前掲邦訳書、二三〇―二三二頁）。なお筆者の知る限り、ポストンとホロウェイの間には直接的な交流はないようである。

(23) Holloway, Revolution, p.165.（前掲邦訳書、二〇四頁）

(24) ibid., p.188.（同、二三二頁）

(25) John Holloway, Change the World Without Taking Power, Pluto Press, 2002, p. 8-9.（ジョン・ホロウェイ『権力を取らずに世界を変える』大窪一志・四茂野修訳、同時代社、二〇〇九年、二八―二九頁）

(26)「初めに叫びがある。われわれは叫ぶ」。ibid., p.1.（同、一三頁）

(27) Postone, Time, Labor and Social Domination, pp.291-98.（邦訳、四六六―四七六頁）

(28) 筆者がポストンと個人的に対話しているときにも、たとえば「多元的な時間性」(multiple temporality) という概念を一貫して拒否する姿が印象に残っている。たとえばアジアにおいては、西欧的な資本主義的時間（抽象的時間）によって社会の中心は支配されたとしても、生活の深層や周辺において、非―資本主義的な時間は残存もしくは併存しているのではないか、という考え方を、ポストンは拒否する姿勢を取る。

(29) ポストンは普遍性の浸透に対する反作用として、特殊具体的なものの理想化（ロマン主義）や、普遍抽象的存在の象徴化とそれへの攻撃（反ユダヤ主義）を説明する。たとえば以下を参照。ibid., p.174.（邦訳、二八九頁）

(30) 注二九を参照のこと。

(31) 野尻英一「否定性、歴史、資本の有機的構成――主体性変容の原理論のための試み」（注二〇に前掲）、一〇三頁

(32) しかしこれはホロウェイやネグリ、ポストンの責任ではなく、日本の文化的状況と資本の有機的構成の高度化との関係を指摘する洞察や論考の発信がなされていないこと、つまり日本の知識人の責任であろう。

(33) Antonio Negri, Marx Beyond Marx: Lessons on the Grundrisse, Pluto Press, 1996 (New Ed.).［原著はイタリア語。Marx oltre Marx : quaderno di lavoro sui Grundrisse, Manifestolibri, 1998.］（アントニオ・ネグリ『マルクスを超えるマルクス』清水和巳ほか訳、作品社、二〇〇三年）

(34)「『（帝国）』のなかには、ネグリの分析はいつでもそうなのですが、巨人たちの衝突が現れてきます。……それぞれの側のパワーは、相手のほうに浸透しているとは見られていません。資本主義における対立の両側の間の関係は、外的なものとしてあつかわれています。それは、まさしく、資本が労働に依存している関係にあることを示す痕跡を消し去ってしまうという大きな難点をもっている『マルチチュード』という用語を、筆者が資本に対する反対勢力を描く言葉として選んだことに示されています。」Holloway, Change the World Without Taking Power, p.173-74.（邦訳、三三九―三四〇頁）

(35) Holloway, Change the World Without Taking Power, p.167.（邦訳、三二七頁）

(36) ibid., p. 170.（邦訳、三三三―三三四頁）

(37) Michael Hardt and Antonio Negri, Commonwealth, Belknap Press, 2009, p. 150.（アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『コモンウェルス（上）』水嶋一憲ほか訳、ＮＨＫブックス、二〇一二年、二四一―二四二頁）

(38) ibid.（同）

(39) Hardt and Negri, Empire, p. 289ff.（邦訳、三七三頁以下）

(40) ibid., p. 413.（邦訳、五一二頁）。なおこのネグリ／ハートの「愛」をめぐるこうした所作は、近著『コモンウェルス』などでも強化され繰り返されている。Hardt and Negri, Commonwealth, p. 179ff.（邦訳（上）、二八五頁以下）